

第10期第4回河内長野市市民公益活動支援・協働促進懇談会会議 会議録

日 時：令和5年7月31日（月）14時～16時
会 場：河内長野市役所5階 501会議室
出席委員：久、岡島、大谷、新西、須田、安井、山本
事務局：古谷、向原、小松、出水

1. 開 会
2. 案 件
 - ① 令和4年度協働の取り組みについて
 - ② その他
3. 開 会

<資料>

資料1 令和4年度協働の取り組みについて
資料2 アクションプラン（たたき台）
当日配布 かわちながのボランティア・市民活動センター活動報告書

<参考>

第3回使用資料一式

資料1に基づき、事務局より説明

久会長：ありがとうございました。
多岐にわたっておりますが、ご意見ご質問ありましたらお願いします。

岡島副会長：5ページのボランティア活動団体数に関してですが、前回会議の中で登録締め切りを厳格にしたことで団体数が少なかったという話があったと思いますが、今年は大丈夫だったのでしょうか。また、福祉系の団体以外へのアプローチが課題となっていたかと思いますが、最近の取り組みや成果があれば教えてください。

事務局：団体募集につきましては、春に簡易版を作成し、秋には冊子型での発行を予定しており、広報誌等を通じて募集を行います。福祉系以外の団体へのアプローチにつきましては、補助金の応募団体等にも声かけを行い登録につながった例もございます。

岡島副会長：ありがとうございました。掲載団体について分野の内訳はありますか。

事務局：冊子の中では、活動テーマごとに掲載しております。テーマ分野の中で、それぞれのつながりを深めて頂きたいと考えております。

久会長：違う角度から見れば今の報告は団体数だけですが、もう少し突っ込んでみれば質

的なものもみえてくるのではないか。そこから河内長野市の現状と課題が見えてくるはずなので、そのあたりをもう少し追いかけるとよいのではないかと思います。さらに申し上げますと、法人格の有無の割合など、今年度の分析の際にはもう少し何か内容が見えてくるところまで突っ込んでもらえるとうれしいです。

事務局：わかりました。

久会長：13 ページ市民参加の実績のところ、ワークショップ6回と記載がありますが、6件ですか6回ですか。

事務局：ワークショップは6回です。3案件についてそれぞれ2回ずつの計6回です。

委員：そのあたりも今後、わかりやすく記載してください。

事務局：わかりました。

久会長：他市においてもワークショップをすることが目的化してしまっていて、何のためにやっているのかが見えづらいものが増えてきました。そのあたり河内長野市はどうなっているかなと思っています。具体的な話をすると、計画づくりの時にワークショップをされますが、とりあえず意見を聞きましたというレベルで終わっていることが多くないですか。具体的な計画の中にワークショップに集まって頂いたメンバーの声がどのような形で取り入れられているのかが見えないものが増えてきている。そういった質的な部分も追いかけてほしい。

8 ページ過去の提案制度で成案化されたリストがありますが、今どうなっているかは追いかけられますか。

事務局：リストの一番下にあります「ピアは一と」につきましては、平成31年度の成案化事業ですが、今も動いております。他に「NPO 法人フルル花の福祉の地域応援ネット」も活動しておりますが、そのあたりもう少し詳細に把握していきます。

久会長：協働事業提案制度はあくまでもスタートの時に応援をする。あるいはマッチングのお手伝いをする。という制度なので継続して活動してほしいという思いから、現状についても評価の対象にしてほしいと思います。

岡島副会長：13 ページ市民参加の実績にワークショップと意見交換会とありますが、具体的にはどういった際に開催されているのでしょうか。

事務局：各課に対し目標や課題を設定し住民が参加するもの全てを抽出してもらっています。令和3年度は「南花台における理想の公園像とは」「加賀田小学校・加賀田公民館の複合化に関するワークショップ」「文化的景観に関するワークショップ」の3件です。

久会長：南花台の公園ワークショップは、2回行ってその後どうなりましたか。

事務局：どのような意見が出たかなどの共有はされているかと思いますが、その後の詳細についてはこちらでは把握できておりません。

委員：南花台の公園について今一番注目しているのは、授業の一環で地元の中学生たちが、どのような公園にしたいかというアンケートを取り、それを基に考えるという取り組みを行っています。どこまで実現するかわかりませんが、こどもたちの夢をまとめています。

久会長：私も公園づくりと一緒にさせて頂く機会がありますが、その中で兵庫県川西市にキセラ川西という地域があります。そこにある公園は徹底的にワークショップを行い、今も市民の方が運営して色々なイベントを行っています。その中で子育て世代の方から「プレーパークをやりたい」と声があがり、その方が中心となってプレーパーク部会を作って自分たちで動かしています。デザインをする時から何をやりたいかという活動につなげて、言った限りは責任をもって動いてもらう。そういう連携を取っています。さらに、掃除も「お掃除大作戦」というネーミングで楽しみながら掃除をするようなやり方が出てきています。そのような展開が生まれてくるといいですね。「意見聞きました。ありがとうございます。」で終わってしまったたり、市民側も「こうだったらいいな」とある意味夢のような勝手な意見が多く出てくるが、言った以上は責任をもってその通り使って頂いたり、あるいは何かあれば自分たちも関わっていくようなところへ展開すれば、ワークショップの効果が発揮できると思っています。今後、公園担当の方にひとつひとつの公園で具体的な使い方を一緒に考えていけるようなワークショップを増やして頂きたいと思えますし、さらに言うならば公園は公共空間なので、みんなでやっていくということが案外やりやすい場所です。そこでいわゆる新しい公共と言いますか、みんなで動かしていくというきっかけづくりにもなると思いますので、ぜひとも公園だけで終わるのではなく、そこから街の魅力をどうやって増していけるかということところへ繋げて頂ければうれしいです。

委員：南花台はサッカー場と公園の両方が平行で動いているのですが、先日サッカー場で交流会が開催されました。市役所担当者は設計士を連れてきていて、みなさん意見を言ってくださいとのことで、こどもたちや私たちは意見を言ったのですが、私たちの意見はどこまで反映されるのでしょうか。意見交換とはいえ、どこまで私たちの意見が反映されるか、結局は市の方針で決まってしまうのではないかと不安です。

委員：よくある傾向で、こういう会議でも「ご意見を頂きます」と言われるが、意見を頂いたという実績を作っただけになるということは行政ではありがちで、実際にどういう変化になったのかは、その後に会議がないので言って終わりになってしまい、どこまで反映されたかがわからないということはよくあります。もちろん、お伝えしてその先どうなったかまで突き詰めない私たちもよくないのだとは思いますが。

久会長：私に関わる公園ワークショップでは、必ず案が出てきた段階でもう一度参加者にお見せしてお返しをします。そこで修正が入って最終案となります。設計はプロでないとできませんのでその部分は任せて、仕上がった図面をもう一度参加者に見て頂き、自分たちの思いがきちんと伝わっているのかをチェックしてもらいます。そうした過程を経て工事に入ってもらっています。そうしないと先ほどのお話のように、聞きっぱなしということになります。きちんとしたキャッチボールをしてこそ、ワークショップで意見を頂いたということにはなります。そういう細かいところまでプログラムの設計をしてほしいと思います。

岡島副会長：今、委員の方々のお話に出ていた内容については同じ感覚を持っております。「ランドスケープデザインからパークマネジメントへ」と本に書いてありました。昔は公園をデザインするのに理系の建築家の方が「ここに山を作って、ここにこういうものを置いて」とデザインされるのですが、数年後にはだんだん利用者が減ってきてしまう。今はもう少し文系的といいますか、社会的な思考を入れてパークマネジメントするそうです。久会長がおっしゃるように、市民の方に参加を頂いたらフィードバックしながら、公園が自分たちのものだ意識を高めていくのが最近の傾向のようです。大変だとは思いますが、もう一步踏み込んでいくのが最近の流行りかなと思えました。あともうひとつ、行政への市民参加ということに関してですが、近隣の自治体ですが「若者会議」や「外国人市民会議」を開催して、色々なことを行政に提案してもらっています。中にはきちんと予算もついて、実施される取り組みもあります。2年ほど前ですが、地域にある大学としては、そういう取り組みがどのような効果を持つのかを調査し、報告書にまとめました。「若者会議」から出てきた企画がどれくらいよかったかについては、われわれ評価する立場にありませんのでしておりませんが、そういう取り組みが教育的効果や人材育成効果としてどういうものがあるのかということ、ピフオーアフターで比較をしてみると、若者が毎年25名選ばれるのですが、市の課題を市職員と一緒に勉強しながら自分たちなりの企画を立ち上げて市長にプレゼンするという機会を経て、かなり大きな人材育成効果があります。10年続けますと、25名かける10年で250名。そういう若い人で市の課題がわかっていて、市役所の中にどういった部署があって、どんなことをやっているかといったことに関心と知識を持った若者がいるまちと、そうではないまちでは大きな違いがあるのではないかという提言を市長にさせて頂きました。このような市民参加の新しい取り組みを河内長野市でも考えて頂き、さらに取り組んで頂ければもっとよくなるのではないかと思います。

委員：ワークショップでのテーマ設定や運営はどのようにされているのですか。自治協働課で設定されているのですか。

事務局：各部署で行っております。

委員：南花台はどこの部署になりますか。

事務局：政策企画課が担当しております。

委員：政策企画課にこういうテーマで開催して欲しいと依頼するのですか。

久会長：今のご質問は、住民側、行政側どちら側から話を持っていくのかということだと思います。それぞれのところにみなさん公園を持っておられるのに、なぜ南花台からスタートするのかということもあると思います。地域から持ち込んで公園の担当者が動いたのか、公園から地域に持ち込まれたのか、その関係性だと思います。

委員：こういう取り組みは知らなかったのですが、よい試みだと思います。

岡島副会長：南花台はいわゆるURの集約事業として、かつては集合住宅が建っていたところを、今

後どういう風に活用していくかというところは市役所としても検討して、政策企画課が中心になって、どのような公園にしていくのかを住民にも参画してもらって一緒に考えるというジェスチャーだったと思います。そのジェスチャー自体は大事なことです、さらにもう少し踏み込んでほしいという声だと思います。

委員：南花台では小中一貫校開校に向けて、地域で一番大きな公園を学校のグラウンドにするという話も進んでおり、その公園の代わりといった意味合いも持っています。また、小中一貫校のグラウンドをどのように活用するかについては、近隣住民の意見交換会もあったのですが、結局は近隣住民からは意見を取り入れてもらえないというクレームが上がっています。そういった経験から、ワークショップでの意見も取り入れてもらえないのではないかという思いを持っています。公園は令和7年9月オープンですし、学校は来年4月開校なのでしっかり進めてほしいです。

久会長：協働のお手伝いをしている宝塚市もニュータウンが多く、子どもの数が減ってくる中で小学校の統廃合が始まっています。一地域に2小学校があったところを1つに集約しようということになったときに、地域のまちづくり協議会の役員さんにすごい方が多く、教育委員会が説明に来た際に「これは地域の問題なので、地域で話し合います。教育委員会の方は横で聞いておいてください」ということで、協議会の中で2年ほど話をされました。最後の結論がなかなか素敵で、「2つの小学校を両方ともいったん廃校にします」でした。どちらかに統合されると不満がでてくるので、「両方とも一旦廃校にします。名前も変えます。校歌も変えます。」というところに落ち着いた。もちろんどちらかの校舎は使わないといけないのですが、それ以外、すべての伝統はリセットするということに落としどころを見つけました。こういうことが本当の意味での地域自治だと思います。地域のもめごとは地域で受け取って解決をする。「市役所になんとかしてくれ」ではないという動きです。このような動きが河内長野市でもできればいいなと思います。

委員：みなさん納得の上で進むのはいいですね。

久会長：事務局から全般的な紹介を頂きましたが、これはみなさんにアピールしたいという協働の事例はできましたか。そこが欲しいです。例えば、富田林市の若者会議などのように新しい試みや、何か面白いユニークな取り組みが協働の中でもっともって出てきたらいいなと期待しています。そのあたりが河内長野市はまだおとなしいなと感じています。茨木市では、11月に文化会館を立て替えて「おにクル」というユニークな名前の複合型施設を作るのですが、徹底的に市民参加で市民と一緒に盛り上げていこうという話にしています。ひとつ具体的なのは、敷地の中に立派な広場ができるので、その広場をどのように利用できるかというのを、もともと市民会館が建っていた場所にみんなで芝生広場を作って、そこで2年間ほどどんなことができるのかを検証してきました。11月に完全オープンですが、その延長上で動かしていきます。1・2階が子育て支援センター、3～5階が文化施設、6階に市民活動センター、7階にプラネタリウムが入るのですが、色々なところでクラウドファンディングに挑戦してお金を集めて進めていこうとしています。今、取り組んでいるのは、子育て支援センターで木製遊具を買うためのクラウドファンディングです。センターを作り上げるときに、市民と市役所と一緒にやりましょうという掛け声のもと、キャッチフレーズも「そだてる広場」ですが、このような動きが河内長野でも起きればと期待しています。

委員：お手元に資料を配らせて頂いた“南花台ふれあいテラス”は、ソフト面で補助金を頂いて立ち上げたのですが、広場の中を改修しようとするればハード面で申請はできるのでしょうか。

事務局：またご相談頂ければと思います。

委員：先日、消防の方が巡回に来られて、マットが燃えにくいものでないといけない、カーテンも長いものはいけないなど色々指摘され修正して対応したのですが、改めて確認して対処したいと考えておりますので、申請をしたいと思っています。

岡島副会長：私どもの大学がある市には大阪府内最大のUR団地である金剛地区があります。そこでのまちづくりを大学としてもお手伝いすることになり、ニュータウン問題を色々勉強しようということで、金剛地区の住民が南花台へ行って取り組みを学ぶ見学会を企画しています。そういう経緯があり南花台に伺ってお話を聞いているのですが、ユニークでキラッと光る取り組みかはわかりませんし、また実際には課題もあるのですが、私の印象としてはラジオ体操に取り組む方であったり、数字に強い方であったり、そういう方々と話をすると、生き生きと活動をされていたので、印象としては河内長野にもこういう素敵な取り組みをされているところがあるのだなと感じました。

久会長：もっともっと市職員の方が他の協働事例を勉強して、私たちもこれを河内長野市でやってみたいという声が出てくるといいなと思っています。そういう意味では市民側からの提案事業はあるけれども、若手職員の提案事業などがあってもいいのかなと思います。

事務局：南花台は地域の方が一生懸命盛り上げて頂いています。住民の力、どちらかと言うとずっと住んでおられる住民の方の力が大きいのかなと思います。でもそこには若い人が入ってこない、次の担い手ももちろんいないということは市の中でも認識しています。そこで今年度、市のブランディングということで、何か目標を持って市の職員が同じ目標・意識をもって“河内長野市のいいところはこれだ”とパッといえるように職員の意識改革を始めようということで、政策企画課を中心に全庁的に取り組もうとしているところです。その中で若手の職員が各部署から出て行って盛り上げていこうとしております。市民と一緒に協働でどんな河内長野市の魅力を発信していくかというところになると思うので、こういった場で様々な声を伺いながら、本日頂いたワークショップに対するご意見も、自分たちのことは自分たちでという声を伺ったことも担当課に伝えてやっていきます。

久会長：参考になるかわかりませんが、茨木市では市役所内の雰囲気を変えるのに20年以上かかっています。そのスタートは都市計画マスタープランを作成する際に、当時の都市計画の次長さんがユニークな方で、直属の係長に「20年後に茨木市役所を引っ張っていきそうな職員を一本釣りして連れてこい。」という基準でメンバーを集め、市民ワークショップに入って市民と一緒に夢を描いてやっていこうという雰囲気を作っていました。一本釣りされた職員も人事異動で部署が変わる際、次長に「4月から異動するので次の担当者を連れてきます。」と伝えると、「あなたが指名されているのだから、部署が変わってもあなたです。」とおっしゃいました。「しかし要綱の中に〇〇課〇〇

係とかいてあります。」と答えると、「変えてしまえばいい。」ということで同じメンバーで進めていきました。「直属の上司から、邪魔が入る。」という声が上がると、「この仕事にも辞令が出ている。この仕事をする時は私の部下だから、もしそのようなことを言う上司がいれば私が直接言います。」と言って下さり、動きやすい環境を作ったことで、元気な職員たちのネットワークができました。その職員たちが今、部長・課長となり市民協働へ理解のある上層部ができ、本格的な協働が進み始めています。20年をはかかりますが、こういうような形で元気な職員のネットワークを作って頂くと、じわじわと効果が出てくると思います。あて職ではなく、やりたいという人でネットワークを作って頂けると効果が出てきます。色々トラブルがあれば、自治協働課がフォローするというのもお願いしたいと思います。

久会長：他いかがでしょうか。ではまた今年度の事業については来年度お話を伺うこととなりますが、もっともっと頑張ったというところが表にどんどんでてくるような1年間にして頂ければと期待しています。では2番目、「市民公益活動の支援及び協働促進に関するアクションプランの策定について」ということで、指針は作らせて頂きましたので、今度はアクションプランを作るということになります。これもまずは事務局から説明をお願いします。

資料2に基づき、事務局より説明

久会長：ありがとうございます。全体的に見て頂いて、今回修正頂いた内容以外でも結構ですので何かございましたらお願いします。

岡島副会長：細かいことで申し訳ないですが、6ページのS/B・C/Bはわかる人が少ないと思いますので、ソーシャルビジネス・コミュニティビジネスと書いたほうがよいのではないかと思いました。あとは、字が大きくてよかったです。もう一点、10ページ情報の収集・提供ですが、中身を見ると提供はされているが、収集の活動があまりない感じがします。

久会長：例えばですが、ここは市民活動センターの役目になると思うのですが、先ほどから出ているような他市の先進事例や助成金情報の収集・提供など市民活動団体ではなかなか時間がさけずうまくいかないところを積極的に収集・提供するのがいわゆる中間支援の役割かなと思います。

事務局：他市の情報につきましても、中間支援を担って頂いている社協さんと共に視察の機会を設けています。河内長野市に持ってきてそのままびったり全てがはまるとは思っておりませんが、やり方、方法等について河内長野市スタイルができるよう、まずは知るところからということで、社協さんと連携を取りながら情報収集を進めていきたいと考えております。

委員：協働という言葉が出てきますが、現時点で河内長野市のまちづくりもそうですが、協働できていると評価されていますか。連携で終わっているところがまだ多いですか。協働を目標とされていますし、推進しようと文字からも読み取れますが、協働という

言葉を使い始めてからかなり年数は経っていますが、今の段階で担当者としてどんなふうに見られているか、評価されているかを教えてください。

久会長：先ほどの委員のお話を別の角度から見れば、アクションプランの割には抽象度が高いと思っています。ここを変えなさいということではないですが、公表しないけれども別表で「ここに書いてあるものは、具体的にこのように進めていきます。」というようなものがあれば、書いてある内容が共有できるのかなと思います。そういう観点で言いますと、先ほどから申し上げているのですが、自治協働課は頑張っていると思いますが、他の部署は本当に協働まで行っていますかということだと思います。地域福祉は否が応でも協働で行かないと仕方がない分野になってきています。他の分野はどうですか。もしなかなか協働まで行けていないのであれば、先ほどお話ししたような職員提案制度のような職員に協働を進めるような動かし方が、具体的にどう表れてくるのかというような展開があればいいなと思っています。岡島副会長がおっしゃったパークマネジメントというのは、専門家だけが動かしてきたハードなまちづくりの分野から、マネジメントをみんなでやろうという協働に大きくシフトしているし、国交省がすすめて始めています。今まで、「道路を使うな、公園を使うな」と言ってきた人たちが、「どんどん使ってください」に変わってきているので、河内長野市もしっかり付いて行ってほしいです。

委員：市民の協働ですが、そこを動かすためには行政間の横断的な協働が必要で、連携にとどまらない協働までいくような仕組みとしてできていないと、なかなか市民までおりにこないし、市民が協働をしていると思っていても、実際は担当課だけしかつながっておらず、そこのご意見だけを頂いてダメという判断となり、せっかくやる気になっているものが潰されてしまうということが現状としてあります。やはり市民を動かそうと思えば、小さな成功体験を積み重ねないと新たなワクワクするような、キラキラするような取り組みはなかなか出てこないし、若い方たちのアイデアを頂いても、それが実現するためには行政間の横のつながりが仕組みとしてできていないといけないし、評価の仕方も変えていかないと発展的なものになっていかないのかなと思います。ただ「協働やっています」という言葉だけで終わってしまっているのは、まちづくりにも広がっていかないかなと思います。厳しい言葉を頂くこともありだと思います。私はまちづくり会に参加していますので、自分たちでこれいいよねと思って繰り返してやっていることも多くて、自己満足でやっているようなところもあるのですが、厳しいお言葉を頂くのも色々な情報も持ってきていただくから、「今のニーズはここと違うのだから、もうちょっと変えていかないといけない」という発展性はそこから生まれるのかなと思います。専門的な知識をお持ちの方からのお声も絶対大事だと思うので、行政側も地域の協働についてもっとしっかり見て頂きたいし、お力を貸して頂くことも必要かなと思います。

事務局：たしかに耳の痛い話ではありますが、しっかり取り組みたいと思います。

委員：南花台は政策企画課が市民と常に会議を行っていますので、色々な若い人の意見を吸い上げて改革して頂いているとは思いますが、政策企画課で止まっているかもしれません。そこからどう進むのか。他の課へは行ってないのかもしれませんが。

委員：美加の台と南花台は同じような新興住宅地であるのに、南花台がどんどん改革されて

いますが、美加の台は公民館すら建ててもらってなかったことを根に持っています。子どもの数も同じように減っているという背景がある中で、地域住民としては色々な気持ちがあります。それでも美加の台の住民は一生懸命取り組んでいるので、その気持ちを高めるようなことが大切で、ほったらかしにされているように感じてしまうとフェードアウトしてしまう。そこの気持ちを挙げてくれるのも行政のちょっとした関わり方や言葉、評価であると思います。メンタル面のところは目に見えなくてやりにくいところですが、知っておいていただきたいと思います。何か言っても「お金がない」で返ってくるが、それはわかっています。ないのなら工夫しましょう。アイデア出しましょう。というところをもっと高めて頂きたいし、そうすることによって協働が進むと思います。

久会長：少しがった見方をすれば、岡島副会長からご紹介があったように南花台は非常に大きな問題を抱えているので、動かざるを得ないところがあると思います。積極的に協働を行っているかといえば、仕方なく行っているという見方もできます。南花台でうまくいけば美加の台を含めて他の地域へ広めていこうという姿勢でモデル的に行っているのか、南花台の問題が大きくなってきたのでなんとかしたいというところでどまってしまうのかで大きな違いが出てきます。本当に南花台がモデルだといえるようなところまで行っているかを外から見ているところからです。コノミヤさんに2階を提供してもらい、関大が入って、外からいっぱい資源が南花台だけに入っている訳です。市役所と市民だけで動かしていると言われるとそうでもないように私は見えています。では他のところに同じように資源を投下してくれるのかということになると、どうなのかなと思います。美加の台はまた違うモデルを作ってくれれば良いと私は思っています。条件が違いますから。

委員：一つ跳んでいるのは住民のパワーです。高齢者含めて何かしようとなれば集まって、学校支援もその他の支援も、そこまでできるのかと驚くくらいです。そういう結束力というのはすごくできているので、市も動かざるを得ないのではないのでしょうか。

委員：10 ページのところに情報の収集・提供とありますが、結局提供の方しか書いていなくて市としても社協さんと今後も収集を続けていくとありますが、現段階ではどのような情報をどのような形で収集していますか。

事務局：様々な事例等については情報収集も行い、現地にお邪魔するという機会は昨年度も今年度も設けており、事例についての取り組みや方法について学びを深めている状況です。

委員：ネットサーフィンのような表面的な方法ではなくて、実際に行っているのですね。

事務局：はい、もちろんネットサーフィンで探すこともありますが、今までの個人的なつながりも含めて事例を調査し、河内長野市に近いもの、活用できそうなもの、社協さんが力を入れていきたいという分野で合いそうなものなどを提案し、一緒に回っているところです。

岡島副会長：「南河内の集い」という集まりがあり、富田林市、大阪狭山市、羽曳野市、河内長野市の市役所担当課、社会福祉協議会、市民活動センター、大阪大谷大学が入って情報共

有しているのですが、例えば今日の資料にもあるように、「補助金を出すのが活用されていない」「手を挙げてくれる団体がない」「固定化している」という事象は河内長野市だけでなく周辺自治体みんなが同じような課題を抱えているということを知るだけでも、ひとつ大事な情報収集になると思いますし、せっかく大学も参画しているので、補助金を有効活用できていない理由について聞き取り調査を行い、整理してまとめるなどいろんなことができると思います。このような場も十分情報収集の場になりうるので、引き続きこのような場を活用して頂ければと思います。

33 ページのイメージ図の庁内横断組織について、前回伺った際にはコロナのこともあり会議が開けていないという話であったと思いますが、今年度はどのようなテーマで、いつ頃開催の予定ですか。先ほども色々とお話が出ておりましたが、やはり市役所内で協働が重要だという意識をすみずみまで行き渡らせることや、協働がないまちとはどのようなものなのかという危機意識を含めて醸成させるのが、このような庁内の横断組織だと思います。今年度の動きについて何か決まっていれば教えてください。

事務局：各課に協働事業推進員が1名ずつおりますが、実際ここ数年は研修等も実施できていない状況でありました。今年度、内容については検討中ですが、秋ごろに集まって頂いて何かしようと考えております。

久会長：先ほど岡島副会長からのご指摘で補助金の話がありましたが、コミュニティビジネス、ソーシャルビジネスを実践されている40代以下の方は、市役所のお金をあてにしていけないし、市民活動センターも利用するメリットを感じていない。そういう方々は動き始めていますが、待っていても繋がれない。おそらく最初は断られますが、そこにどうアプローチをするかがポイントです。私も市民活動センターを複数の市でお手伝いしていますが、このままいけば市民活動センターが廃止されるところがどんどん出てきます。結局、本当に動いている人たちからすると、期待されていないのです。そこは危機感を持っておかないといけないと、指定管理を受けている団体は必死になって頑張っています。そういう市役所から見えない風景みたいなものも追いかけていく工夫をして欲しいと思います。

委員：12ページにクラウドファンディングとサステナブルファイナンスとして、資金を集める新たな仕組みと書いてあります。実際まちづくりの活動をしている人が、どのようにすれば資金を集めることができるのかを簡単に知る方法を作って頂きたい。今ありますか。

事務局：今すぐにはないです。

委員：そうですね。どこかの役所のホームページへ行って調べて、あと細かいところは担当の方に聞くということになりますが、次の段階に踏み出す一歩目がわからない人がきついていると思います。これだけまちのことをやっている人でもわからないのであれば、丁寧に入口を広げて頂いて次へ進めるものにしてもらえると、次のステップへ挑戦しようとするのではないかなと思います。補助金も何回も何回も教えて頂いてようやく手を挙げられるくらい、身近ではないです。特に行政が実施されているとなれば、提出物が多いのではないかと思われるのではないのでしょうか。身近でないからどんどん使う方は減っていくし、活用される方は同じ方になってしまうのではないかと思います。

久会長：先ほどご紹介した茨木市の「おにクル」は、いろんな形のクラウドファンディングでお金を集めています。市役所内はどうか、今クラウドファンディングを使ってお金集めしている部署はありますか。なぜそれを聞いているかというのと、自分でやってみないとわからないでしょということです。

委 員：挑戦したことありますが、難しいですね。

委 員：何に気を付けないといけないのかもわからない。

事務局：実際、挑戦してみないとどこが難しいのか、どういうコツがあるのか等については、ご相談頂いたときに自分が経験した部分はお伝えしたいと思いますし、そういったところは中間支援に任せたいと思っています。

委 員：まだたたき台ですが、アクションプランにわからない言葉が載っているので、そこは説明を書いてもらおうとアクションを起こしやすいと思います。

久会長：アクションプランには書けない話ですが、市役所の中にも元気な人はいる訳ですからそこをどう繋いでいけるかだと思います。これは市役所内だけでなく地域もそうですし、学校もそうです。元気な人はまだまだ少ないので、どう繋いでいけるか。先ほど政策企画課が本当に自分事として動いているかどうかという話も、課としては動いていると思いますが、個人として面白がって動いているかどうかまで見ていくと色々面白いことができるのではないかと思います。先日、大谷委員の団体が補助金申請に手を挙げて頂いたので、終わってから半分冗談半分本気で「美加の台小中学校を“夢見る学校”にしたらどうですか」とお話しました。「元気な校長先生と、元気な先生をみんな美加の台に集めてしまって、モデル的に動かしてみるのはどうですか」と。たぶんできると思います。元気な先生を分散させてしまうから、みんなそれぞれの学校で悶々としている訳です。「変えたいけど、まわりが冷めている」ということになっていませんか。元気な先生を集中投下するといいのかなと思います。そういう機会やプロジェクトを市民協働課がコーディネートして作ってもらえると変わっていきけるのかなと期待しています。

委 員：期待しています。

久会長：そうすると、南花台はコノミヤテラスに視察が来るし、美加の台は小中学校に視察が来る。そういう特徴出しができるといいなと思います。

委 員：特色ある地域づくりですね。

委 員：自治会の活動でニュータウン系のところはそれなりに組織があつて、高齢化で悩まれているとは思いますが、やはり自治会はコロナもあつて活動自体が止まってしまい、再開を望まない声もあります。協働というテーマで考えてみるとごみ出し、地域の清掃、防災活動など、いわゆる昔のスタイルで行っています。それだけやっておけばという意識があります。今回言われている協働というものは、地域の課題を掘り起こしていったってどう解決していくかというきめ細やかなものだと思いますが、なかなか自治

会としてはどのようにすればよいか、ついていけないところがあります。先ほどから話題が上がっていますが、元気のある人はいますので、その人たちをどう繋げていくかがポイントだと思います。例えば資料に記載されている地域サポーター制度ですが、市の職員が地域におられるので、まず自治会の活動に入って頂いて、活動のコアメンバーになって地域の立て直しにアドバイスを頂きたいと思います。このままいくと自治会活動はなかなか活性化していかないし衰退していきます。祭りには元気な人は集まりますが、それ以外の清掃や防犯に協力して初めて祭りができるというところを進めていきたい。美加の台や南花台といった成功モデルとして、事例を紹介してもらえるのもいいのですが、昔からある地域に根差した自治会をどうするかという点では地域サポーター制度や若者会議のようなものを取り入れていけばよいかと思っております。

久会長：そういうところも横つなぎと言いますか、うまくいっている地域活動団体を紹介頂き、何が秘訣なのかを解説するような情報提供が重要かなと思っております。昔NHKで「ご近所の底力」という番組がありましたが、その地域活動版のようなものが出てきたらいいなと思っております。地域活動団体がうまくいっているところはいくつか共通点があります。自治会長さんにはよく「若者に言うべからず集」をお伝えします。ひとつは「もう同じことをやっている」です。同じことをしているかもしれませんが、せっかく提案してくれてくれたので任せてみてほしいです。それから、「好きなことばかりされても困る」です。好きなことをやりたいと思っているし、特に若者はそうだと思います。まず好きなことを存分にやらせてもらって、周りの人たちの動きを見てもらい、自分で気づいてもらうことで横展開されていくと思うのです。そういうことに取り組んでおられるところは若者もどんどん入ってきています。

委員：今、久会長がお話された「もう同じことをやっている」という言葉は、本当によく出てくる台詞で私も何回聞いたか忘れたくらいです。「もうやったし、今更やっても無駄やで」という親心もわかります。わかりますが、「あなた方がやった時代と今とは時代も社会も変わっている」というところを、いままでやってこられた方が心得ておくべきことだと思います。少し話は戻りますが補助金・助成金について、よく笑い話で「10万円もらうのに、10万円分働かないといけない」と言われます。それだったらもうしなくていいとなりますし、「10万円もらうのに、20万円分働かないといけない」となれば、そこまでしてお金をもらいにはいけないのでやめておこうかということに落ち着きます。かつて支援センターにいた身として感じたのが、手間は手間だが、事を起こそうかという人には事務能力に長けた人が少ない。事務作業は何かというと、計画を立てて、実行して、振り返ること。勢いのある人は、ワーとやってなんかよかったなという達成感だけが残って、何かうまいことできたし、これからもいけそうという雰囲気が始まって、雰囲気終わる。そこはしっかり計画を立てて、計画通りに実行して、どの程度の効果を得たのか冷静に振り返る。そういう大きなメリットがありますよということをよく説明したことを思い出しました。

委員：先ほど、新たに申請しようかとお話させて頂きましたが、前回の申請時に大変だったことを思い出しました。いろんな資料を作って提出して、満額頂けなかったは残念でしたが、やればやるだけ自分たちに返ってくるので、苦勞してよかったかなと思っておりますが、その過程は大変です。

委員：公のところからお金を引き出すということは、単純にお金だけの話ではなくて、行政がきちんと認めたというお墨付きが得られます。その効果はお金以上のものがあると思います。

委員：それは近隣の方々、地域の方々にも認めて頂けるということにもつながりますね。

委員：地域のおじさん、おばさんがワーワー言っているだけのことではないということを示せるという点については、お金以上のものがあると思います。

委員：苦勞した甲斐がありました。

委員：個人に頂くものではなく、団体に頂くものです。私も熱量だけの人ですから細かいところは、得意な人できる人に担って頂き、やはりそこはチームで動くのも活動していくうえでは大事なところですし、行政が認めた活動だからと応援してくれる人もいます。そうすることで人も繋がるし、人材育成にも繋がっていくと思います。

委員：まず動くことで、周りの色んな人を巻き込んでいます。

久会長：その辺りが、11ページの先ほど説明頂いた「スキルを持つ人材の発掘を進め」という話だと思うのですが、今の状態で本当に受け皿としての地域活動団体が、このスキルだけでその人に仕事を任せてくれるのかどうか怪しい。なんでもかんでもやらされてしまうので、「それなら結構です」と言われてしまいます。10年ほど前、枚方市の小学校区にまちづくり協議会が立ち上がり講演会に呼ばれたのですが、元大阪府の部長さんが役員でおられ会長さんに「この方、現役時代に一緒に仕事をしたことがある」とお伝えしますと、「元公務員で書類作成は抜群なので退職後すぐ引っ張り込んだ」と話されました。そういうノリが欲しいです。細かい書類づくりなどは、その方に専属でお願いしています。さらに言えば、箕面西小学校区でイベントを開催したのですが、広い地域なので車で来られる方も多く、交通整理が必要だったのですが、「あの人、初めて参加してくれたけど交通整理が抜群」と話をしていると、周りの方があの方は元警察官だと教えて下さりました。それぞれのスキルを活かして専従して頂くとおそらく色んな方が地域活動を支えてくださると思います。みんな現場ばかりに送り込まれると、不満がたまってきます。「スキルを持つ人材の発掘」と書いてありますが、どう運用するかというところがポイントだし、うまく活用しようと思えば地域活動団体も「こういう役割分担をお願いしたい」と示して連携していく必要があると思います。

私の研究室の学生はまちづくり専攻なので、地域活動をやりたいはずなのですがやっていない。「なぜ自分の地元でやらないのか」と聞くと、「入口がありません」と言います。つまりウエルカムになっていないから、外の地域で活動しているそうです。典型的な話が、「あなたのお父さん、お母さんが自治会に入っているのだから、子どもが直接来られても困る」と言われるそうです。個人ではなく家で会員になっているという意識です。

委員：学校が地域の中になく、高校がない、近隣にないとよく言いますが、高校・大学はないけれども、高校生・大学生は地域にいるはずですよ。その学生たちをうまく引き込

む、巻き込むことができれば若い人たちの声も聞くことができると思います。ないものをねだるよりも、あるものを見つけに行かないと協働は進まないと思います。「大学と繋がっているところはいいな」と、どうしてもすぐ言ってしまいます。

委員：地域に住んでいる大学生・高校生が南花台のクルクルに乗ったり、生活応援を手伝ってくれています。

岡副会長：同じく 11 ページで、先ほども若者の巻き込みという話が出ておりましたが、井戸端会議のような交流会というのは具体的な取り組みのアイデアはありますか。

事務局：現時点ではまだなくて、そういう場を作りたいということで、今度社協さんと一緒に事例を学びに視察へ行く予定となっております。

久会長：以前は開催していたのですが、全部止まってしまいました。まちづくり協議会を立ち上げる前にみんなで集まって意見交換を使用ということで開催していたのですが、まちづくり協議会のために開催していると誤解されてしまって、特に役員さんたちは「もうまち協が立ち上がったのだから必要ない」ということで、通常のオフィシャルな会合ばかりになってしまいました。今になって特に女性から「もっとフランクな、あの井戸端会議を続けていくべきだったのでは」という声が出ています。おそらくニーズはあるのですが、役員さんがその井戸端会議の必要性を理解できるかどうかです。いろんなところでお薦めしますが、一番のハードルは役員さんです。「こんな 2 時間の無駄な話が何の役に立つねん」と言われてしまう。

岡副会長：「成果は何？」ということになるのですね。

久会長：そうです。

委員：若い方が言っても上から押さえつけられると次の会議から出てこないです。それこそ「そんな前にもうやった」と言われると出ようと思わないです。

委員：初回の時だったと思うのですが、久会長のお話で「どうしても自治会やまち協は、会長が誰、副会長が誰、会計が誰というのが綿々と続いている。その中でプロジェクトチームを立ち上げて活動して、終わったら解散」という手法をご紹介されていました。もちろんメリット・デメリットはあると思います。あまりにも立ち上げては解散、立ち上げては解散が続くと、確かに継続性はないですが、よく考えてみると継続性のある組織が形骸化していつ新しい力をつぶしにかかっている。それを考えてみるとプロジェクトチーム制もありだなと思いました。その中で、「コレ面白いな」と思う人は残っていきますし、プロジェクトチームを作っても同じ人が会長をしているとか、何か言えば「むかしやっていた」とつぶしにかかってくるということになれば、プロジェクトチームも一時だけ活動して解散となるだろうし、その辺りは同時に進めていけばいいのかなと思います。私も偉そうに言えるほどこの 2 年間、まち協に行っていない。行っていない主な理由は年間 40 万円の予算をどうするということから始まって、年度終わりになると次の年度の予算について、私が参加しているまち協は元々防災活動から始まりましたので、「今年はこの防災センターへ行くか」という話ばかりで、予算消化団体になっているのが見えてきて、自身の都合もあるのですがモ

ヤモヤした感じがありました。身を引く少し前に高層住宅部会というのを立ち上げました。私が住んでいるのが140~150世帯という分譲マンションなのですが、単体で自治会として活動しています。マンションには戸建てとは違った悩みがあるので、2~3か月に一度集まりマンション特有の話題について、井戸端会議をしています。

久会長：河内長野市はそれぞれの小学校に必ず旧村とニュータウンが入っています。川上小学校区で井戸端会議を開催したときの話ですが、ニュータウン側の方がやはり高齢化の問題をお話されました。そうするとすかさず旧村の方が「自分は家の長男として生まれ育っている。旧村の人間は出ていけない。家から通える仕事を探すしかなかった。それに比べてニュータウンの子どもたちは勝手に外に出て行っている。それは家庭の問題で、市役所の問題ではない。」と話されました。自分たちの子ども、孫が出て行ったことで高齢化問題が起きている。そう考えると自助努力でも解決できるのではないかというお話でした。井戸端会議だからこその展開です。

委員：この数年間でZoomなどを使ったオンライン会議が、色々なところで実行されるようになってきました。私も経験ありますが講座を受けるなどはできるのですが、会議として雑談ができるところまではいっていないと思います。

久会長：私が井戸端会議をお勧めするときは、できるだけクリエイティブなやり方にしようと言っています。そうでないと先ほど委員がお話されたように単なる愚痴大会になってしまい、何も成果が出てこないということになってしまいます。ネガティブな話ではなく、ポジティブな話をしようということです。井戸端会議をうまく進める秘訣はいくつかあるのですが、そういうことを提供しながらいい雰囲気の井戸端会議を増やしていくことも必要だと思いますし、先ほどZoomの話も出ましたが、自治会やまち協のDX化の支援は現時点で入っていますでしょうか。

岡島副会長：16ページに「新たな交流方法の検討」と書かれていますね。

事務局：11、16ページを含めて交流会や井戸端会議等を、もちろん顔を突き合わせての会議も大事だと思いますが、それ以外の方法としてオンライン会議等についてもご提案していきたいと考えております。オンライン会議を導入することで、時間・場所等の制約・ハードルを下げた中で、より幅広い世代の方にも参加頂けるという点からも、中間支援組織である社協さんと一緒に考えていきたいと思っております。

久会長：私がお願いしたいのは、地域活動団体のDX化です。

事務局：現在、一部地域におきまして自治会のDX化推進として、回覧板についてアプリ導入の実証実験を進めております。またスマホ講座をまち協、自治会に募集をかけておりますので、アクションプランにも具体的にDX化の文言を入れ込んでいこうと思います。先ほどの井戸端会議について、当初まち協も役員会と別の場として実施しておりました。役員さんがいない井戸端会議の方では、前向きな意見が割と出ていました。ただその会議もわざわざ足を運ばないといけないという制約の中で、だんだんと足が遠のいていったように感じます。地域活動団体さんから多く出る意見として、役員の負担が大きいというものがあります。日々の活動を進めながら、出向かなくても参加し、回覧板を回すことができるなど、可能なところはDX化するなど、活動内容をすみ分け

して記載できればと思います。

委員：ICTの活用で、今年度市民活動センターでSB/CBの講習会を開催するのですが、その際にはパンデミックで外出ができないという場面よりは、話は聞きたいけれども足を運べない方に向けてZoom等を使うことで参加者数の増加を目的にしています。社会福祉協議会では今年度よりICTタブレットの活用として、会議資料の配布や会場に集まらなくても会議を開催できるように各地域にタブレットを配布し、いつでもどこでも参加できるような体制づくりを計画しています。

委員：Wi-Fi環境はどうなっていますか。タブレットを配布されてもWi-Fi環境がなければ使えないですね。公民館とかはないですね。

委員：タブレットなど機器をお渡ししても、ネット環境がないというところが次のハードルとなっています。ご自宅に環境がある方は、ぜひ使用していただきたいですが、環境の整っていない方には、イズミヤゆいテラスはWi-Fi環境がありますので、機器に慣れて頂ければと思っています。

委員：そこまで行くのが大変なので、やはり地元の公民館や集合できる施設はWi-Fi環境を整えるか、環境が整っている学校を使わせてもらうなど、そういうルートを作ることが先ではないかと思っています。本当に不便に思っている方は、ゆいテラスへ行くことも大変だと思っていて、地元で使うことができて誰かがサポートしてくれるという仕組みにってもらう方が、より広まっていくと思います。
この部屋は入っていないのですか、遅いです河内長野は。Wi-Fiは必要不可欠なものになってきています。子どもがタブレットを持って帰ってくる社会なのですから、大人にもやさしい社会になってほしいです。

委員：イズミヤの4階はWi-Fi環境ありますが、使えるのは年間1,000円払った会員だけですか。

委員：いま少し変わってしまして、自由に使って頂けるようになりました。

久会長：明石市コミュニティ創造協会という中間支援団体がありますが、コロナ禍が始まった4月くらいから自治会役員を中心とした「お試しZoom会議」をテーマは特に設けず、お話をする練習をしましょうということで開催しました。3~4回開催すると、使いこなせる人たちが出てきて、そういう方々が周りの人に教え始めます。結果として地域に広まっていったというケースがありました。地域の何人かを育てさえすれば、地域に広がっていくという仕掛けを作ると、瞬く間に広がっていくのかなというひとつの事例です。

委員：私がまち協を離れるきっかけになったのが、コロナ禍が始まったときに「せめてLINEグループを作ってコミュニケーションを取りませんか」と提案したときに、まち協の中ではIT系に強い方々から「なんでそこまでしないとダメなのか」と言われたことです。「集まらないのであれば、集まらなくていい」「予算が余れば返せばいい」という言葉を聞いて、そういうものだったのかと思いました。地域活動のDX化というのは、コロナ禍を経てオンラインでコミュニケーションを取るという一般社会では当たり前

のことで、例えば参加者が何らかの理由で足が動かなくなり、車いすでなければ出られなくなった。寝たきりになった。という状態であっても参加できるツールを手に入れたと思うと、そこまでして参加したくないという人は置いておいて、なんとかその場の雰囲気を知りたい人には Zoom 等を使って中継することもできます。目の前にはスマホかパソコンしかないけれど、その向こう側には人がいると思うと緊張感が出てきます。DX 化は喫緊の課題です。せっきゃくコロナをきっかけにこれだけのものを手に入れたのですから、使わない手はないと思います。しかし、残念ながらネットに接続する環境にないただの箱ですので、Wi-Fi 環境を整えることは必須です。

久会長：寝屋川市市民活動センター指定管理者のお手伝いをしていますが、平均年齢 70 歳くらいと高齢化が進んでいますが、昨年の取り組みで面白かったのがメタバースを使って活動フェスタが出来ないかということで、使える人を連れてきてアバターでフェスタが開催されました。面白がってするとできるという事例です。私の大学はこういうのが大好きなので、コロナ禍に私もメタバースの中でアバターを作って発表したことがあります。そういう時代になってきています。どんどん先に行くと面白い世界が待っているかもしれませんので、その辺りも実験的に取り組んで頂ければと思います。

委員：河内長野市は割と守りに入ってしまう市なので、挑戦して欲しいです。着実に進めるタイプだとも思うのですが、前を向いて挑戦して欲しいです。

委員：まちづくり協議会というのは役員だけの会ではないので、地域の方が何を望んでいるのかを聞くために、井戸端会議ではないですが交流カフェを開催しています。その場で色んな意見を聞いて、その中から新たな事業が立ち上がってきました。コロナの期間は閉ざされていましたが、8 月から再開します。役員の中だけで話をしても進歩がないので、2~3 年止まっていましたが交流カフェを再開し、新たなアイデアが出てくることを期待しています。

久会長：アクションプランについて若干意見を頂きましたので、修正をかけて頂くとともに私からお願いしたいのは先ほど申し上げた通り「この 5 年間くらいで、いったい誰が何を進めるのか」というのをリストアップして頂き足らずや書き過ぎの部分がないかを事務局の方でもチェックして頂きたい。書いてあるがなかなか難しいなというものが見えてくるかもしれません。最後、具体的な事業ベースに落として最終チェックをお願いできたらと思います。
それでは委員のみなさん、③その他で何かございますか。事務局はいかがですか。

事務局：今回、事務局からはございません。

久会長：色々ご意見賜りありがとうございました。案件すべて終了させて頂きましたので、懇談会を終了させて頂きます。ありがとうございました。